

本位＝生徒本位の理念を基本にしたからこそ、共創の学校づくりを推進できたのである。

生徒・子どもたちは、将来、共創の社会を担う。社会が抱える環境問題、少子・高齢化など様々な課題を共に解決し、社会改革の主体者へと育たなければいけない。高嶺小学校の生徒は、現在も、自分達が望む学校を協同でつくりあげている。その活動は、お互いに自分を超えて全員のこと・全体のことを考えているので、連帯を基本とする共創の社会をつくる芽を育んでいることになる。そして、その活動をおして身につける力は、他者と結びつきながら、自他共の幸せを実現しようとする「生きる力」になっている。

【引用文献】

- 1 小松隆二・中野晃男・富田来『共創カウンセリングの理論と実践』論創社、2011、207頁。
- 2 E・デュルケム（井伊玄太郎訳）『社会分業論（下）』講談社、1989、261頁。
- 3 J・ハーバーマス、清水多吉監訳「史的唯物論の再構成」法政大学出版局、2006、34頁。
- 4 渡邊満「第7章教室の規範構造に根ざす道徳授業の構想」林忠幸編『新世紀・道徳教育の創造』東信堂、2002、121-122頁。
- 5 加賀裕郎「第3章モラル・ディレンマからジャスト・コミュニ

ティヘーコールバーグ 理論の展開」佐野安仁、吉田謙二編

『コールバーグ理論の基底』世界思想社、1993、57頁。

6 森田洋司・清永賢二「いじめ——教室の病い」金子書房、1986、30頁。

表紙によせて

白梅学園大学子ども学部 准教授 杉山 貴洋

白梅学園大学では、小平市から療育事業の委託を受けて、アートワークショップに取り組んでいます。遊びや表現を通じて、子どもと学生が交流し、地域の拠点を形成しているのです。「だれでもアートワークショップ」と呼ばれる白梅のワークショップは、様々な分野で高い評価を受け、昨年度は、こども環境学会活動賞を受賞しました。地域連携のモデルケースとしても、大学の実践教育としても、少しずつ注目されています。